

有田・小田部42

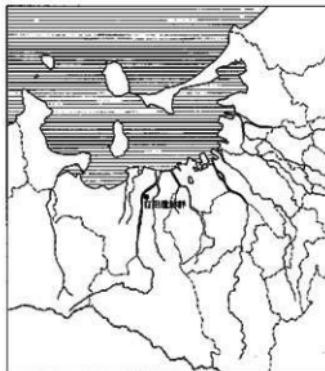
— 有田遺跡群第211次調査報告書 —

2006

福岡市教育委員会

有田・小田部42

— 有田遺跡群第211次調査報告書 —



遺跡暗号 ART-211
調査番号 0428

2006

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市には、有形・無形の優れた文化財が数多く残されています。これらの文化財は先人が築き上げてきた福岡の歴史と文化を理解し、今後の福岡市の発展にとって欠くことのできない貴重なものです。本市ではこれを念頭に、昭和48年に福岡市文化財保護条例を制定し、多岐にわたる文化財を保護・活用するよう努めてまいりました。

しかしながら、近年の都市開発等によって市内の歴史的環境は大きく変貌しています。このようにやむを得ず失われる埋蔵文化財について本市教育委員会では、新たな開発に先立ち発掘調査を行い、記録保存しています。

本報告書は、共同住宅の建設に伴い調査を実施した有田遺跡群第211次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、有田遺跡群の北西側端部を検出することができました。弥生時代早期の土器、石器などが出土しました。

今後、本書が文化財への理解と認識を深める一助になると共に、学術研究の資料として活用していただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査から本書の作成にいたるまで多大なご協力を頂きました毛利文夫様をはじめ、調査にご理解を頂きました有田地区の住民の皆様等関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例　　言

- 1 本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市早良区小田部5丁目193番地内で発掘調査を実施した有田遺跡群第211次調査の報告書である。
- 2 調査記録の作成および整理分担は、次のとおりである。
遺構実測・・・・・・松浦一之介
遺物実測・・・・・・山口謙治、吉留秀敏、松浦一之介、谷直子(九州大学大学院生)
遺構写真撮影・・・・松浦一之介
遺物復元・・・・・・木下久美子、田中由紀、宮崎由美子、長浦英美子
製図・・・・・・松浦一之介、木下久美子、山口朱美
写真現像焼付・・・・・柳ダイドーカメラ
本文執筆・・・・・・松浦一之介
- 3 本書で使用した方位は磁北であり、座標は国土調査法第II系に拠る。また、標高は東京湾平均海面高度(T.P.)に拠る。
- 4 本書で使用した地図は、大日本帝国陸地測量部発行の「二万分一地形図福岡近傍十一号」および福岡市発行の福岡市都市計画図を原図としている。
- 5 本書で使用した遺構の略号は、奈良文化財研究所の用例である。
- 6 本書に関わる遺物および記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。
- 7 本書の編集は、松浦一之介が行った。

本文 目 次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の組織	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	2
第3章 調査の記録	5
1 調査の概要	5
2 SX-001	8
3 出土遺物	8
4 まとめ	18

図 版 目 次

図1	周辺遺跡分布図（縮尺1／50,000）	2
図2	有田遺跡群調査地点位置図（縮尺1／8,000）	3
図3	調査区位置（縮尺1／1,000）	5
図4	遺構配置図（縮尺1／200）	6
図5	調査区全景（東から）	7
図6	調査区南壁土層（北東から）	7
図7	調査区土層断面図（縮尺1／40）	9
図8	63磨石出土状況（北から）	10
図9	42鉗錐車出土状況（東から）	10
図10	土器片出土状況（東から）	10
図11	68磨製石斧片出土状況（西から）	10
図12	39土器片出土状況（北から）	10
図13	3土器片出土状況（北西から）	10
図14	70石斧出土状況（東から）	10
図15	51土器片出土状況（東から）	10
図16	出土遺物（土器・土製品）実測図（縮尺1／4）	11
図17	出土遺物（礫石器その1）実測図（縮尺1／2）	12
図18	出土遺物（礫石器その2）実測図（縮尺1／2）	13
図19	出土遺物（砥石）実測図（縮尺1／3）	14
図20	出土遺物（剥片石器その1）実測図（縮尺1／1）	16
図21	出土遺物（剥片石器その2）実測図（縮尺1／1）	17

調査番号	0428	遺跡略号	ART
調査地地番	福岡市城南区小田部5丁目193番	分布地図番号	090 石丸 091 橋本
開発面積	1,578.97m ²	調査面積	433.0m ²
調査期間	2004.06.07～2004.07.23	調査原因	共同住宅建設

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

平成16年3月17日、照栄建設株式会社代表取締役中村悦治氏より、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に対し、福岡市早良区小田部5丁目193番地内における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受けて埋蔵文化財課では、同申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群の隣接地に含まれ、基礎構造が杭打ち工事を伴うことから、同年4月27日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺構密度は非常に希薄ながら現況GL-20cmで遺構面を検出した。また、本遺跡群が立地する台地の落ち際を確認し、これより西側に包含層が形成されていることが判明した。

この結果に基づいて、申請者と埋蔵文化財課は現地保存について協議を行ったが、申請地内のうち新築部分の638.64m²については工事に伴い、遺構の破壊が回避できないため、その箇所を対象とした記録保存のための発掘調査を実施した。

発掘調査は、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課が実施した。調査期間は、平成16年6月7日着手し、同年7月23日に終了した。また整理報告業務は、平成17年度に行った。

2 調査の組織

調査委託 毛利文夫

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

教育長 植木とみ子

文化財部長 山崎純男

調査担当 埋蔵文化財課

課長 山口譲治

事前審査係

係長 濱石哲也

担当 本田浩二郎（前任） 松浦一之介（現任）

調査第一係 山崎龍雄（現任） 田中壽夫（前任）

担当 松浦一之介（現事前審査係）

庶務担当 文化財整備課

課長 榎本芳治（現任）

管理係長 栗須ひろ子（現任） 市坪敏郎（前任）

管理係 鳥越由紀子（現任）

発掘作業 梅野真澄 木田ひろ子 小柳静子 柴藤清志 田中和祐

田中肇 辻節子 辻哲也 德永洋二郎 永井ゆり子

西川吾郎 西口キミ子 古庄孝子 松本順子 三谷朗子

整理作業 木下久美子 田中由紀 長浦英美子 宮崎由美子 谷直子

尚、発掘調査から報告書作成に至るまで、毛利文夫様はじめ、地域住民等関係各位には多大なご協力とご理解をいただいた。記して謝意を表する次第である。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

有田遺跡群が立地する早良平野は、背振山系の一支脈である油山（標高569.4m）から派生した平尾丘陵と、飯盛山や叶嶽を含む低山塊によって東西を挟まれた沖積平野であり、三方を山に、そして北側には博多湾に面している。平尾丘陵より東には、狹義の福岡平野が、また長垂山より西には糸島平野が広がっている。平野内には、東西の山塊を源流とする室見川・名柄川・十郎川・金屑川・樋井川など中小の河川が、博多湾に注いでおり、試掘調査の成果などから、かつては蛇行や氾濫を繰り返していたと推定される。また、平野内の最も東を流れる樋井川は、福岡城築城に際し、

鳥飼低地の西側（今川）に付け替えられた。

古代の早良平野は、ほぼ全域が筑前国早良郡にあたり、和名抄には、郡内に早良・毘伊・能解・額田・平群・田部・曾我の7郷があったと記される。このうち、本遺跡群を中心とした地域は、小田郡の遺跡地から田部郷に比定されている。

早良平野における遺跡の立地状況は、平野部においては博多湾岸の砂丘上や沖積微高地、また丘陵部においては、飯倉丘陵上や、西の飯盛山、叶嶽の東裾部に立地する2者に大別される。

前者には、東から順に西新町遺跡、藤崎遺跡、姪浜遺跡などがあり、弥生時代から古墳時代にか

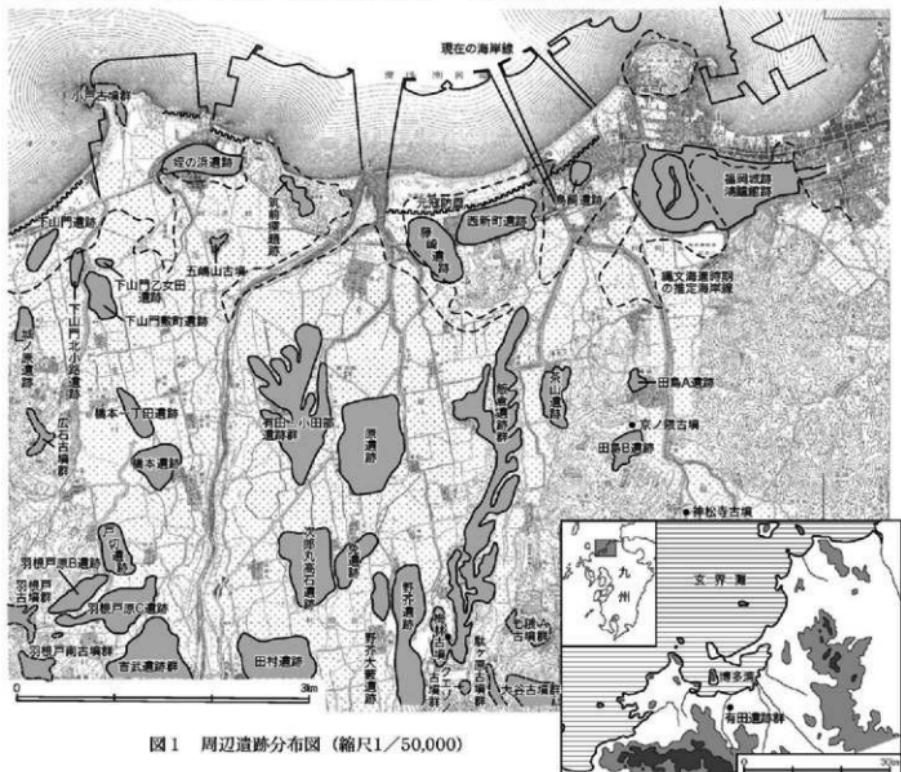


図1 周辺遺跡分布図（縮尺1/50,000）



図2 有田遺跡群調査地点位置図（縮尺1／8,000）

けての集落址や墓地群から構成されている。

西新町遺跡では、弥生時代中期のゴホウラ製貝輪や、ソーダ石灰ガラス製のトンボ玉、古墳時代前期の陶質土器などが、また姪浜遺跡では、漢式三翼鐵、半島系無文土器、南海産貝輪未製品、貝玉など、渡来系文物が多く出土しており、該期の対外交渉にこれら集落の人々が一定の関わりを持っていたと推定される。

沖積高地上の遺跡としては、室見川東岸の原遺跡群、次郎丸高石遺跡群、田村遺跡群、四箇遺跡群、重留遺跡群、東入部遺跡群などが挙げられ、繩文時代から中世にかけての集落が連続と営まれている。また西岸には下山門遺跡、下山門敷町遺跡、橋本遺跡、吉武遺跡群などの遺跡群がある。中でも吉武高木遺跡では、弥生時代には多紐細文鏡や多数の青銅製武器を副葬した壺棺墓や大型掘立柱建物址などが検出されている。また吉武樋渡遺跡では墳丘墓が検出され、「早良王墓」と呼ばれ、早良平野の拠点遺跡であったことが知られる。

飯倉丘陵上に立地する飯倉A～H遺跡では、弥生時代前期から中期の壺棺墓群が検出されているほか、飯倉D遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居址から小型仿製鏡と矛の鉄型が出土している。

有田遺跡群は、この早良平野の北側ほぼ中央部に位置し、南北約1.7km、東西約0.8kmの独立洪積台地と、その裾部に広がる沖積地からなる。古墳の墳丘を除く最高所は、旧大字有田字天神屋敷及び字馬場の境界付近で、標高15m程度を測り、ここから東西南北にむかって緩やかに傾斜している。台地裾部との比高差は12m程度を測る。

現在の行政区では、福岡市早良区南庄・小田部・有田の各地区にまたがる。台地の東側には金屑川が、また西側には、平野内の最大河川である室見川によって挟まれている。室見川は、試掘調査の成果、小字の名称や昭和21年に撮影された航空写真などから、平野の西部を蛇行していたものと考えられ、有田台地の西側はこれにより大きく侵食されたものと推測される。また、台地は八つ手状の谷部によって開析され、起伏に富んだ地形であったが、現在では区画整理事業によりその面影

はほとんどない。

有田遺跡群は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であり、早良平野における拠点集落の一つである。平成18年3月現在、223次にも及ぶ発掘調査が実施されている。また、各種開発事業に先立つ試掘調査などによって、遺跡の様相がかなり解明してきた。

弥生時代の初頭には、環濠が掘削され、以後古墳時代にかけて集落は連鎖と形成されている。明治31年(1898)には、現講論館高校(旧名:西福岡高校)地内から壺棺墓群が発見されており、昭和24年(1949)には発掘調査が実施され、金海式壺棺から銅戈が出土している。

古墳時代の墳墓としては、3基の円墳からなる有田古墳群がある。江戸時代に記された「筑前国統風土記拾遺」には、小田部村に松浦殿塚、筑紫殿塚の存在が記述されているが、これらは順に1号墳、3号墳であると考えられる(2・3号墳は既に消滅)。古墳時代の後期からは、溝や柵列で区画された大型倉庫群が各所に営まれており、官衙関連施設の存在が指摘されている。

また律令時代には、早良郡衙が置かれ、第189次調査では長舎に囲まれた政庁正殿と考えられる大型建物が検出されている。郡衙城の北側には、鴻臚館を発し額田駅を経由して主船司(周船寺)に向かう古代官道推定線が東西に延び、第3次、124次、164次調査などで道路側溝の大溝が検出されている。官道推定線以南の調査区では、倉庫群や大型建物群などの官衙関連施設が多く検出されており、郡衙中枢域は、現在のところ東西3町、南北3町程度と予想されている。このように古代において有田遺跡群は早良平野内で中心的な役割を果たしていたと考えられる。これら官衙関連施設や官道大溝は10世紀前半頃には衰退の時期を迎えて廃絶している。

戦国期には、有田字天神屋敷・馬場に小田部氏の里城があったことが「筑前国統風土記拾遺」に記される。第54次調査地点は、この推定地内であり、該期の溝が検出された。この他、第145次調査地点などでも、中世の溝が検出された。

第3章 調査の記録

1 調査の概要

第211次調査地点は、早良区小田部5丁目193番に所在する。有田遺跡群に広がる八手状の台地のうち、最も北西側に延びる部分の西側端部付近に位置する。調査地点から現室見川までの距離は約130m程度を測る。有田台地の西端部には灌漑水路が南北に流れしており、調査区付近で西と北に分流しており、各々室見川に注いでいる（現在は一部暗渠化）。この水路を境に東側は丘陵地形が残っているが、西側は台地裾部が削平されている。今回の調査地点は本申請を受ける以前は埋蔵文化財包蔵地の隣接地であったが、試掘調査の結果、埋蔵文化財が確認されたため包蔵地が拡大された。調査区の旧字名は長手町である。

本調査は平成16年6月7日に着手し、同年7月23日に終了した。調査面積は433m²である。調査前の現況は田であり、標高約4.2mを測った。調査区の南側から北東に向かって、台地の落ち際を確認した。台地部分は耕地の造作によって大きく削平され、東から西にかけて緩やかに傾斜し、標高4.0m～3.1mを測った。遺構面は暗黄褐色鳥栖ローム層であり、標高3.4～3.2m以下は黄白色八女粘土層となる。検出した遺構は、ピット10数個のみで、建物や柵列あるいは杭列等は復元できない。台地は標高3.6～3.1m付近で急激に傾斜し、これより西側には河川堆積の砂質土層や粘質土層が互層状に堆積し、一部包含層が形成される。台地縁辺部は大きく侵食され、調査区南側付近で突撃段丘を形成していたと考えられる。

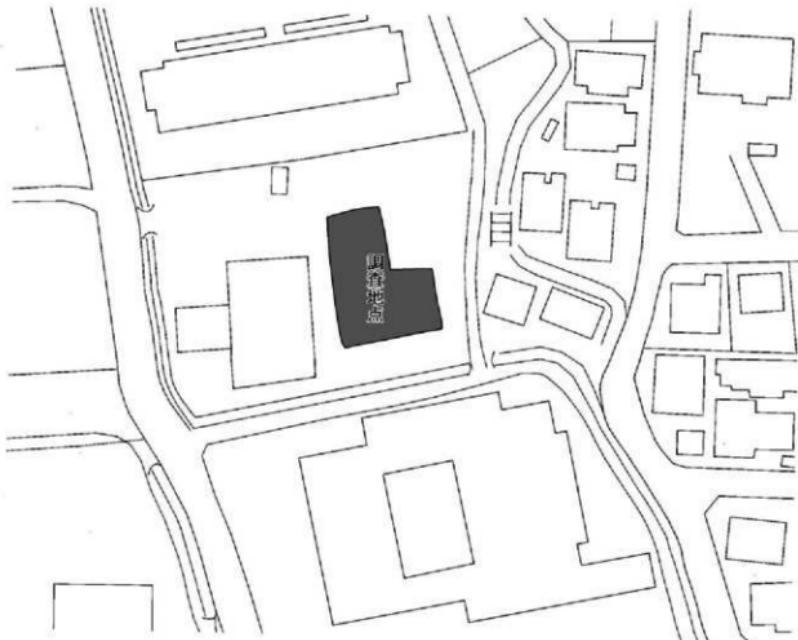


図3 調査区位置 (縮尺1/1,000)

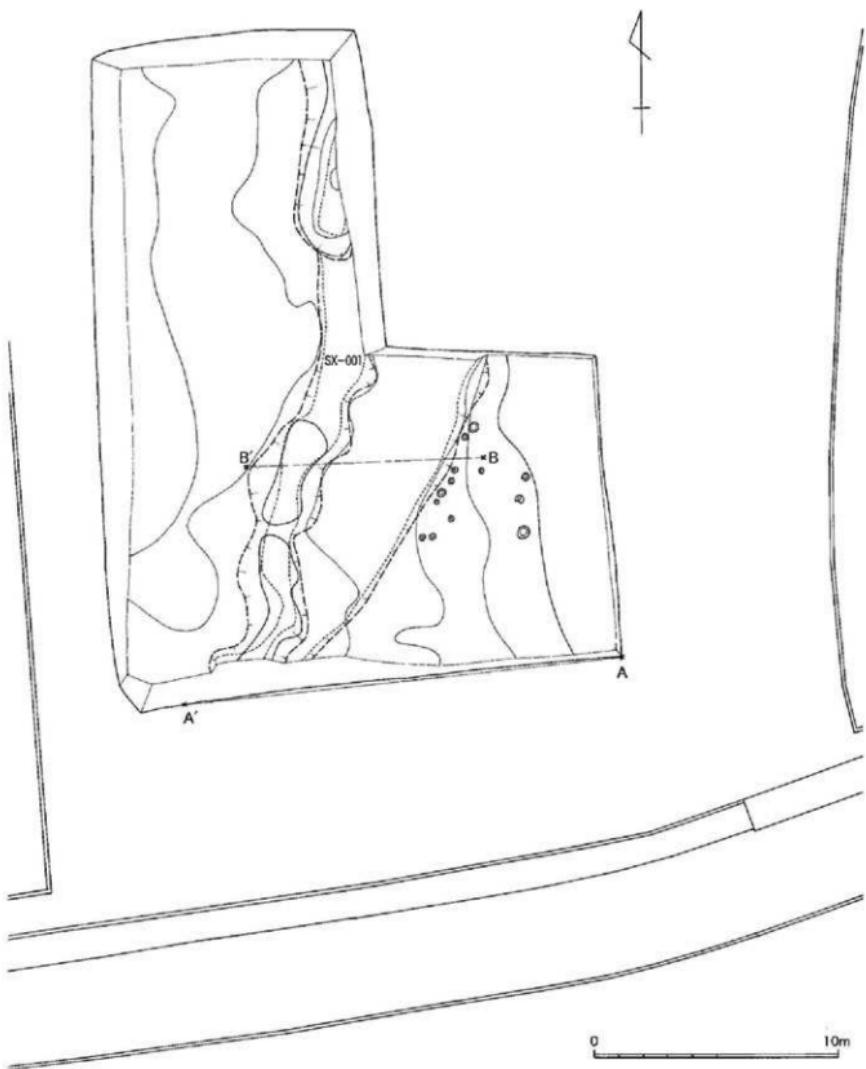


図4 造溝配置図（縮尺1/200）



図5 調査区全景（東から）



図6 調査区南壁土層（北東から）

2 遺構と遺物

(1) 自然流路 (SX-001)

台地の縁辺部から西側に検出された。土層断面の観察から、自然流路と考えられる。調査は縄文時代中期から弥生時代早期にかけての遺物を含むSX-001を検出した後、それ以下の砂層（河川性堆積）には遺物が含まれないことから、以下の掘削を行っていない。

SX-001は幅3~4m、深さ0.5m程度を測り、蛇行気味に北北東に向かって流れている。断面は浅いU字状を呈する。

出土遺物

SX-001流路内から縄文時代中期から弥生時代早期にかけての土器、礫石器、黒曜石製剝片石器などの遺物が出土した。そのうち数点の出土状況を掲載している（図8~15）。出土遺物の総量は、コンテナケース5箱分である。図化したもののは図16~21に示している。この他、未図化のものに黒曜石剝片がある。

土器

深鉢

1は口縁部と胸部に刻目突帯を有し、胸部の刻目突帯から如意状に口縁部が立ち上がる。口径22.8cmに復元される。

壺

2~15は壺の口縁部片である。2は口径22.4cmに復元される壺の口縁部片である。口縁部には刻目突帯を有し、突帯の断面は「コ」の字状を呈する。胎土に白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は内器面が薄い橙褐色、外器面が灰色がかった橙褐色を呈する。3は口径21.0cmに復元される壺の口縁部片である。口縁部には刻目突帯を有し、突帯の断面は三角形を呈する。焼成は良好で、色調は内器面が暗灰色、外器面が灰色がかった橙褐色を呈する。4~15は小片で、口縁部に刻目突帯を有する。20、26~38は壺の底部片である。底径は6.6~8.6cmを測る。41は口縁部片で、口径27.0cmに復元される。断面三角形の突帯を有する。

鉢

16~19、21~25、44、45は鉢の底部片と考えられ、底径は5.8~8.4cmを測る。39は深鉢片で、器高11.7cm、口径19.6cm、胸部最大径20.8cm、底径7.0cmに復元される。胸部には断面三角形の突帯を有し、口縁部は内傾気味に立ち上がる。胎土は粗く、白色砂粒を多く含む。色調は明るい橙褐色を呈する。40は浅鉢の口縁部片で、口径26.4cm、胸部最大径28.4cmに復元される。口縁部は短く、「く」の字状に立ち上がる。胎土は粗く、白色砂粒を多く含む。色調は赤みがかった橙褐色を呈する。43は浅鉢の口縁部片で、口径18.0cmに復元される。胎土は粗く、白色砂粒を多く含む。色調は内器面が黒褐色、外器面は灰色がかった橙褐色を呈する。46は口径15.4cmに復元される浅鉢片である。胎土は粗く、白色粗砂を多く含む。色調は灰色がかった橙褐色を呈する。47は口径15.0cm、器高7.8cmに復元される浅鉢片である。外器面に刷毛目を施す。胎土は粗く、白色砂粒を多く含む。色調は内器面が灰色がかった橙褐色、外器面が明橙褐色を呈する。

壺

48は黑色磨研土器の壺口縁部片で、口径10.2cmに復元される。口縁部は僅かに外反する。外器面には細かい磨きが施される。胎土には白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、灰色がかった黒褐色を呈する。49は頸部から胸部にかけての破片で、頸部径13.4cmに復元される。胸部が大きく張る。胎土は粗く、白色粗砂を多く含む。焼成は良好で、赤みがかった橙褐色を呈する。50は胸部片で、胸部最大径22.4cmに復元される。51は胸部から底部にかけての破片で、同部最大径22.2cm、底径9.0cmに復元される。胎土は粗く、白色粗砂を多く含む。焼成は良好で、赤みがかった橙褐色を呈する。図15に出土状況写真を掲載している。

土製品

紡錘車

42は直徑4.5cm、器高3.0cmを測る完形品である。形状は、高い笠状を呈する。胎土は粗く、白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は灰色

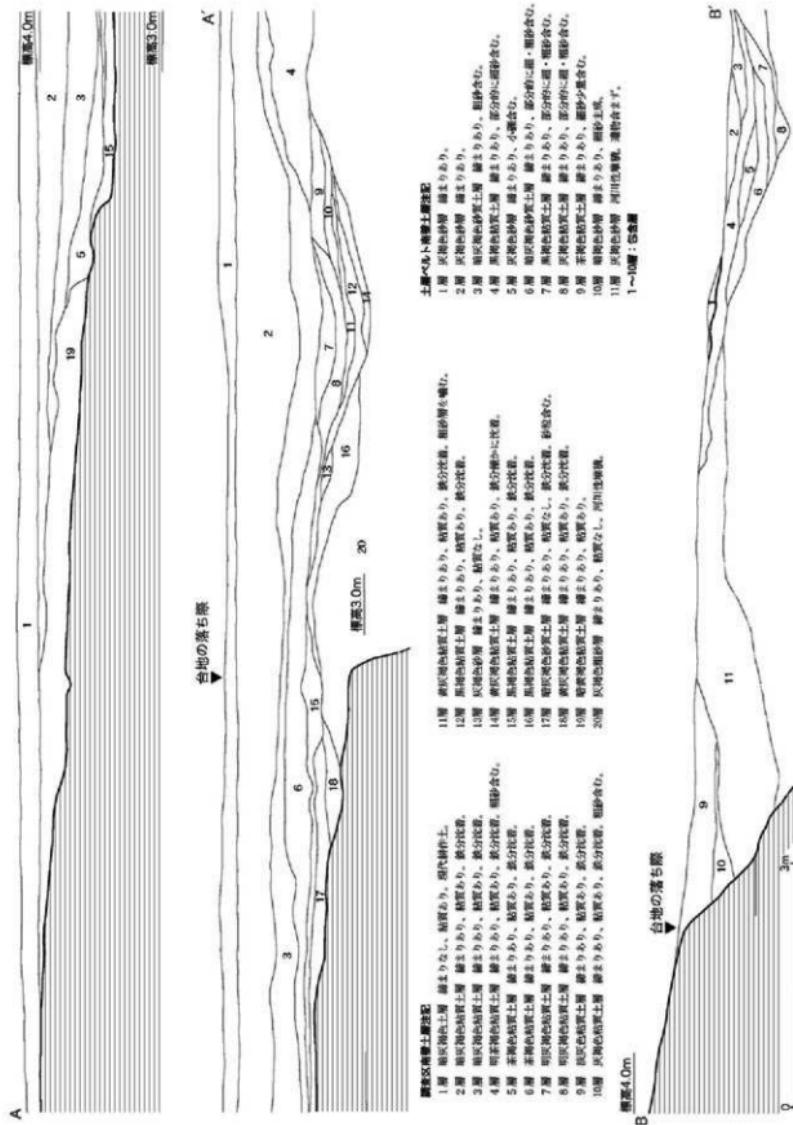


図7 調査区土層断面図 (縮尺1/40)



図8 63磨石出土状況（北から）



図9 42紡錐車出土状況（東から）



図10 土器片出土状況（東から）



図11 68磨製石斧片出土状況（西から）

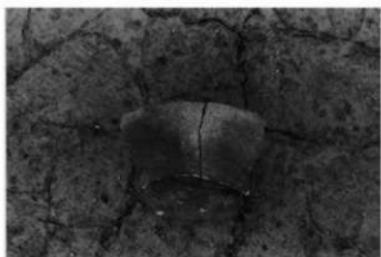


図12 39土器片出土状況（北から）



図13 3土器片出土状況（北西から）



図14 70石斧出土状況（東から）

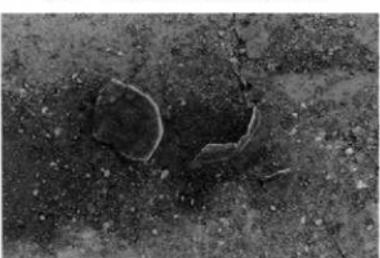


図15 51土器片出土状況（東から）

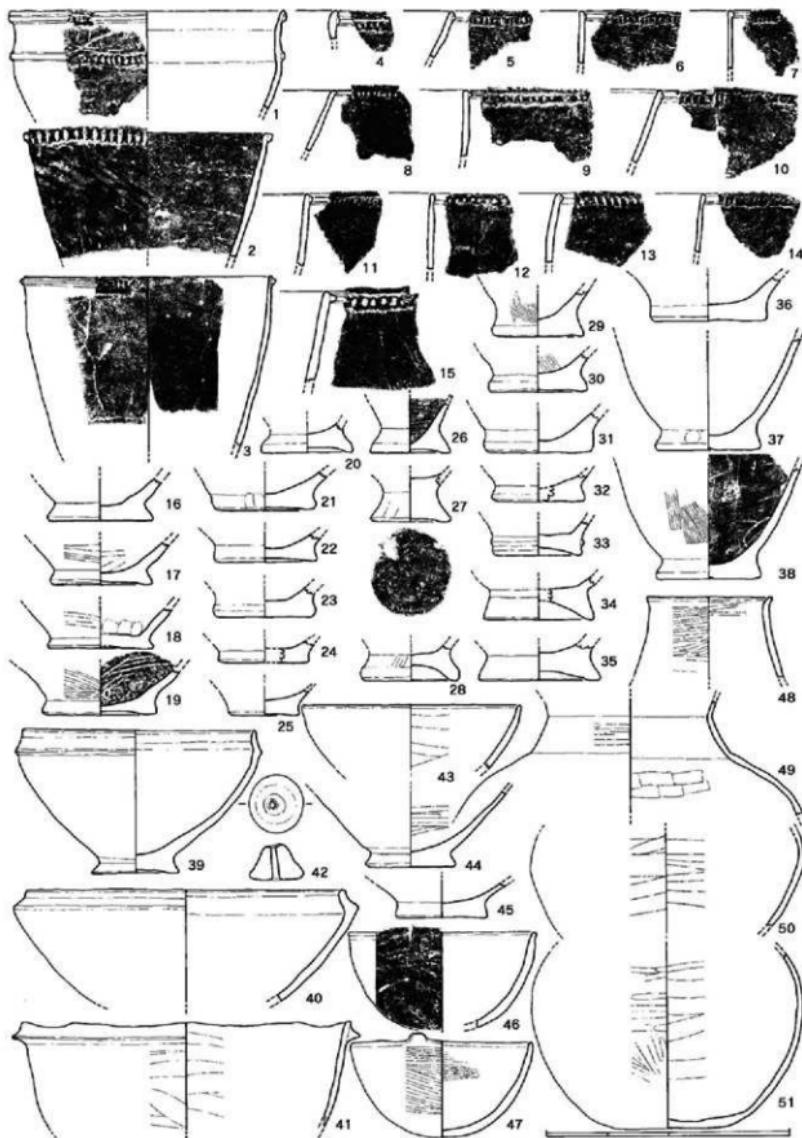


図16 出土遺物（土器・土製品）実測図（縮尺1/4）

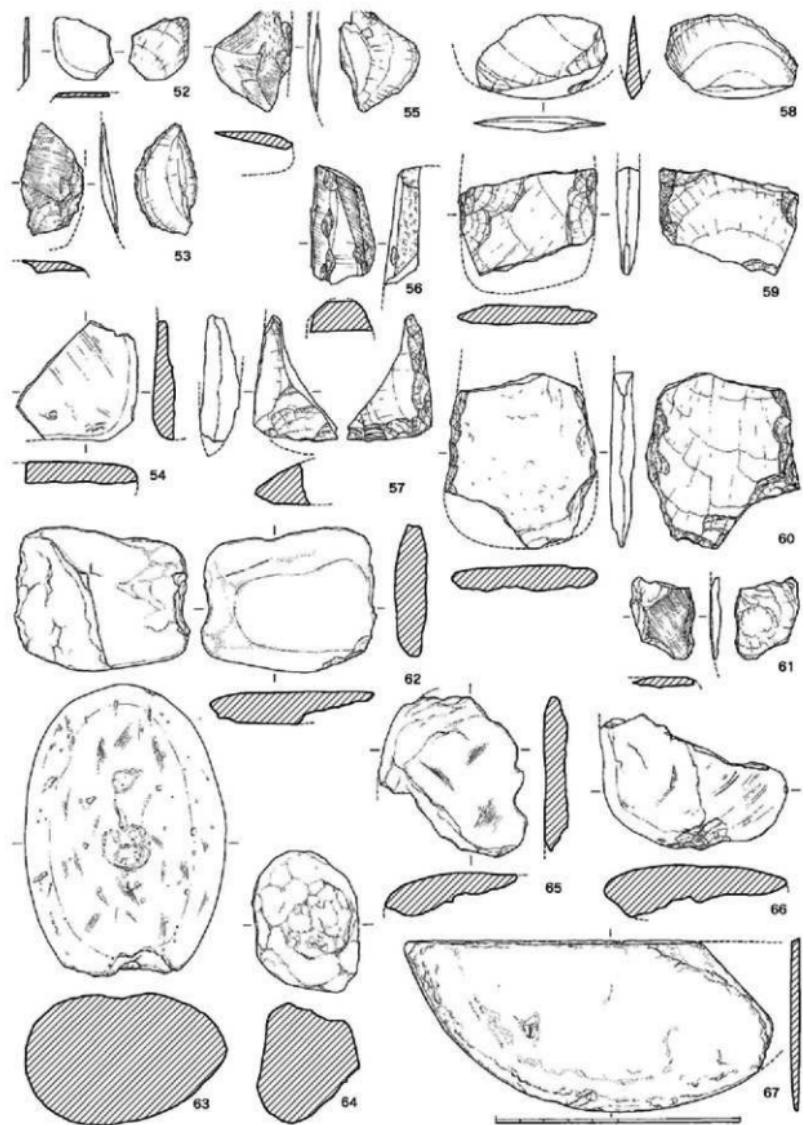


図17 出土遺物（縄石器その1）実例図（縮尺1/2）

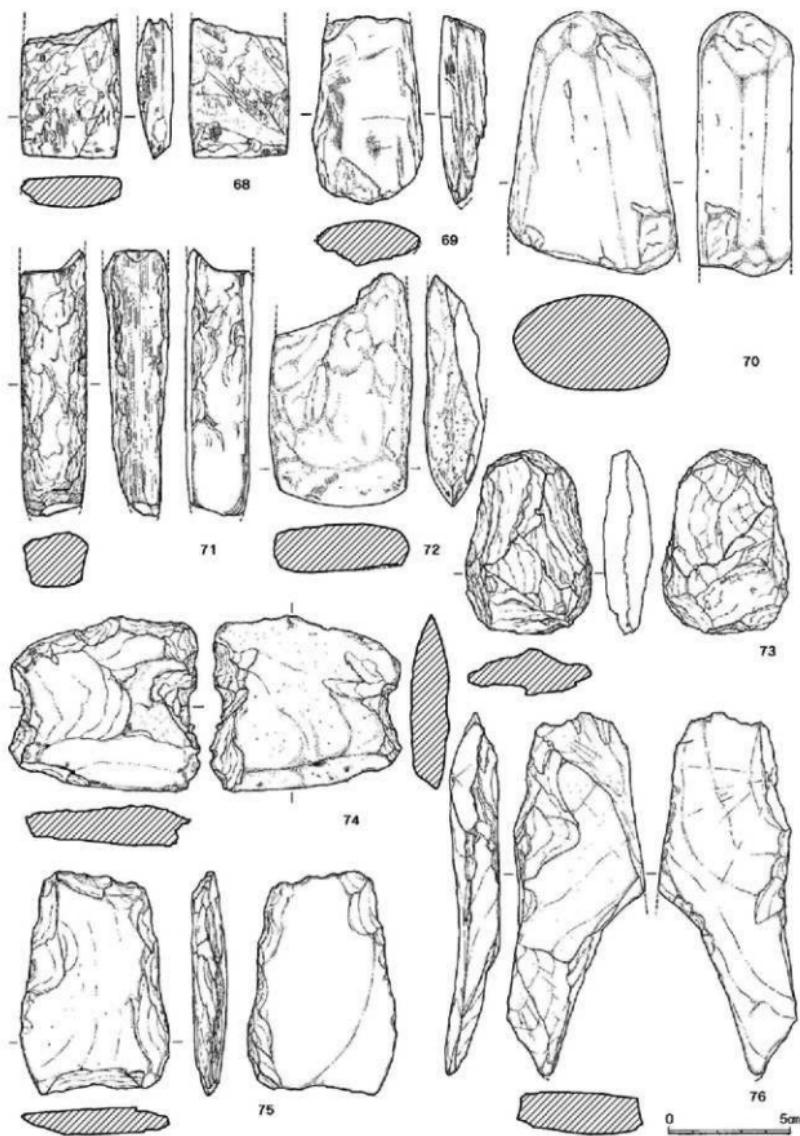


図18 出土遺物（縄石器その2）実例図（縮尺1/2）

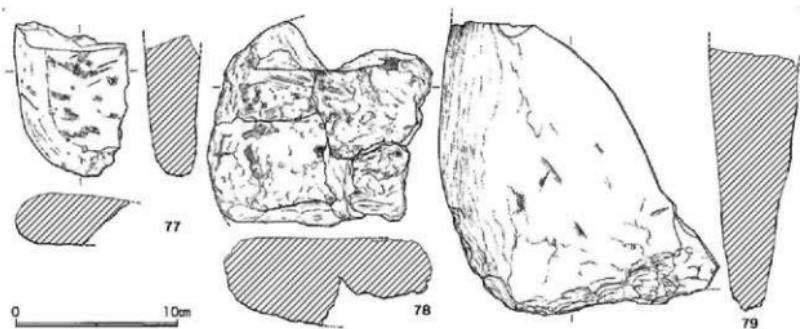


図19 出土遺物(砥石)実測図(縮尺1/3)

がかった橙褐色を呈する。図9に出土状況写真を掲載している。

礫石器(図18~20)

石斧

52は、頁石もしくは粘板岩製の磨製石斧の刃部小片である。53は、頁石製の磨製石斧の小片である。56は玄武岩製の柱状片刃石斧の基部片で、側面に敲打調整が観察される。57は、今山産玄武岩製の打製石斧片である。58は、頁石製の磨製石斧の刃部片である。59は、今山産玄武岩製の打製石斧片である。60は、今山産と考えられる玄武岩製の打製石斧片である。61は、頁石製と考えられる磨製石斧小片で、被熱し破砕している。68は蛇紋岩製磨製片刃石斧で、残存長5.7cm、幅4.1cm、厚1.5cmを測る。基部が欠損し、全体に風化が進んでいる。図11に出土状況写真を掲載している。69は蛇紋岩製と考えられる磨製石斧で、残存長7.7cm、最大幅4.5cm、厚1.8cmを測る。基部が欠損している。70は花崗岩製の磨製石斧基部片で、残存長10.8cm、基部幅4.1cm、残存最大幅7.0cm、厚3.8cmを測る。図14に出土状況写真を掲載している。71は玄武岩製の柱状片刃石斧で、基部と刃部が欠損している。両側面に研磨痕が観察される。残存長10.9cm、幅2.7cm、最大厚2.7cmを測る。72は硬砂岩製の石斧片で、未成品と考えられる。両側面に敲打痕があり、刃部のみ研磨痕が観察される。残存長9.5cm、幅5.8cm、刃部

幅5.2cm、最大厚2.4cmを測る。73は赤間石製打製石斧で、長差7.5cm、最大幅5.2cm、基部幅3.7cm、最大厚1.9cmを測る。75は今山産玄武岩製扁平打製石斧で、残存長9.1cm、最大幅6.1cm、基部幅4.4cm、最大厚1.0cmを測る。刃部が欠損しており、使用痕と考えられる。76は今山産玄武岩製扁平打製石斧で、残存長14.8cm、残存最大幅5.2cm、基部幅4.0cm、最大厚1.9cmを測る。刃部が大きく欠損しており、使用痕と考えられる。

石錘

62は今山産玄武岩製の石錘で、残存長7.2cm、幅5.9cm、厚1.4cmを測る。抉りは浅い。片面の一部が欠損しており、使用により刃部が欠損した扁平打製石斧を転用したものと考えられる。74は今山産玄武岩製の石錘で、扁平打製石斧を転用したものと考えられる。長差7.8cm、幅7.2cm、最大厚1.7cmを測る。抉りは非常に浅い。62、74の両者とも網錐の可能性が考えられる。

磨石

63は花崗岩製の磨石で、片面に細かい擦痕が観察される。長さ11.9cm、幅8.2cm、厚5.3cmを測る。図8に出土状況写真を掲載している。64は砂岩製の磨石で、片面に使用痕が観察される。長さ5.8cm、幅4.4cm、厚4.8cmを測る。66は玄武岩製の磨石片で細かい擦痕が観察される。幅7.8cmを測る。

砥石

54は、砂岩製の砥石片で、片面に研磨痕が観

察される。65は玄武岩製の砥石片で、片面に研磨痕が観察される。77は扁平な花崗岩製の砥石片で、厚さ3.2cmを測る。両面に使用痕が観察される。78は扁平な花崗岩製の砥石片で、残存長12.5cm、残存幅13.8cm、厚さ5.4cmを測る。片面に使用痕が観察される。78は扁平な粘板岩製の砥石片で、残存長17.9cm、残存幅17.1cm、厚さ5.7cmを測る。両面に使用痕が観察される。

石包丁

67は粘板岩製石包丁の未成品で、残存長15.1cm、高7.0cm、厚0.35cmを測る。長さは18cm程度に復元されると考えられる。節理面に沿って石材を加工している。

剥片石器(図20、21)

図示した遺物は、ほぼSX-01の出土品であるが、103は表採資料である。

楔形石器

105は古銅輝石安山岩製楔形石器で、器長3.62cm、器幅2.48cm、最大厚1.45cmを測る。

台形様石器

80は黒曜石製台形様石器で、器長2.7cm、器幅2.55cm、最大厚0.95cmを測る。先土器時代の所産、原の辻型台形石器と推定される。

石刃

110は鉛桶型石刃で、器長3.2cm、器幅1.4cm、最大厚0.37cmを測る。

石鎌

85は黒曜石製剥片鎌で、器長2.75cm、器幅1.25cm、最大厚0.38cm、重さ0.63gを測る。縄文時代後期の所産と推測される。左脚は使用時の欠損と考えられる。86は黒曜石製剥片鎌で、器長3.2cm、器幅1.9cm、最大厚0.3cm弱、重さ1.22gを測る。縄文時代後期の所産と考えられる。表裏とも素材剥離面を大きく残し、先端に表裏から二次加工を加え先端を尖らせており、基部も表裏から粗い二次加工を加え抉りを入れている。87は黒曜石製剥片鎌で、器長2.05cm、器幅1.6cm強、最大厚0.4cm弱、重さ0.75gを測る。表裏とも素材剥離面を大きく残す。88は黒曜石製剥片鎌で、器長2.0cm弱、器幅1.9cm弱、最大厚0.3

cm弱、重さ0.74gを測る。縄文時代後期の所産と考えられる。89は黒曜石製剥片鎌で、器長3.02cm、器幅1.29cm、最大厚0.32cm、重さ0.55gを測る。90は黒曜石製剥片鎌で、残存器長1.4cm、器幅1.4cm強、最大厚0.25cm、重さ0.36gを測る。縄文時代後期の所産と考えられる。表裏とも素材剥離面を大きく残し、先端に表裏から二次加工により抉りを入れ、内湾する基部を造りだしている。91は黒曜石製打製石鎌で、器長2.15cm、器幅1.6cm、最大厚0.4cm、重さ0.85gを測る。基部は平基でやや内湾気味、横断面は凸レンズ状を呈する。表裏とも比較的丁寧な押圧剥離で整形している。右脚は発掘調査時の破損である。92は古銅輝石安山岩製打製石鎌で、残存器長2.7cm、器幅1.98cm、最大厚0.4cm、重さ1.69gを測る。先端および左脚が欠損している。93は姫島産黒曜石製打製石鎌で、器長3.02cm、器幅1.6cm、最大厚0.33cm、重さ1.20gを測る。94は黒曜石製打製石鎌で、器長2.33cm、器幅2.13cm、最大厚0.25cm、重さ0.61gを測る。95は黒曜石製打製石鎌で、器長1.95cm、器幅1.15cm、最大厚0.3cm強、重さ0.67gを測る。基部は平基でやや内湾気味、横断面は凸レンズ状を呈する。96はハリ質安山岩製打製石鎌で、残存器長1.42cm、器幅1.6cm、最大厚0.21cm、重さ0.53gを測る。先端が破損している。97は古銅輝石安山岩製打製石鎌で、器長1.9cm、器幅1.68cm、最大厚0.28cm、重さ0.84gを測る。98は黒曜石製打製石鎌で、残存器長1.68cm、器幅1.40cm、最大厚0.26cm、重さ0.43gを測る。先端および左脚が欠損している。99は古銅輝石安山岩製打製石鎌で、器長1.52cm、器幅1.2cm、最大厚0.3cm、重さ0.51gを測る。右脚先端は欠失、左脚は破損している。100は黒曜石製打製石鎌で、器長2.3cm、器幅1.77cm、最大厚0.42cm、重さ1.52gを測る。101は黒曜石製打製石鎌で、残存器長2.0cm、器幅1.6cm、最大厚0.45cm、重さ1.24gを測る。基部は欠損しているが、使用時のもの可能性を考えられる。弥生時代の所産と推測される。102は黒曜石製打製石鎌で、残存器長1.8cm、器幅2.2cm、最大厚0.4cm、重さ2.26gを測る。基部は平

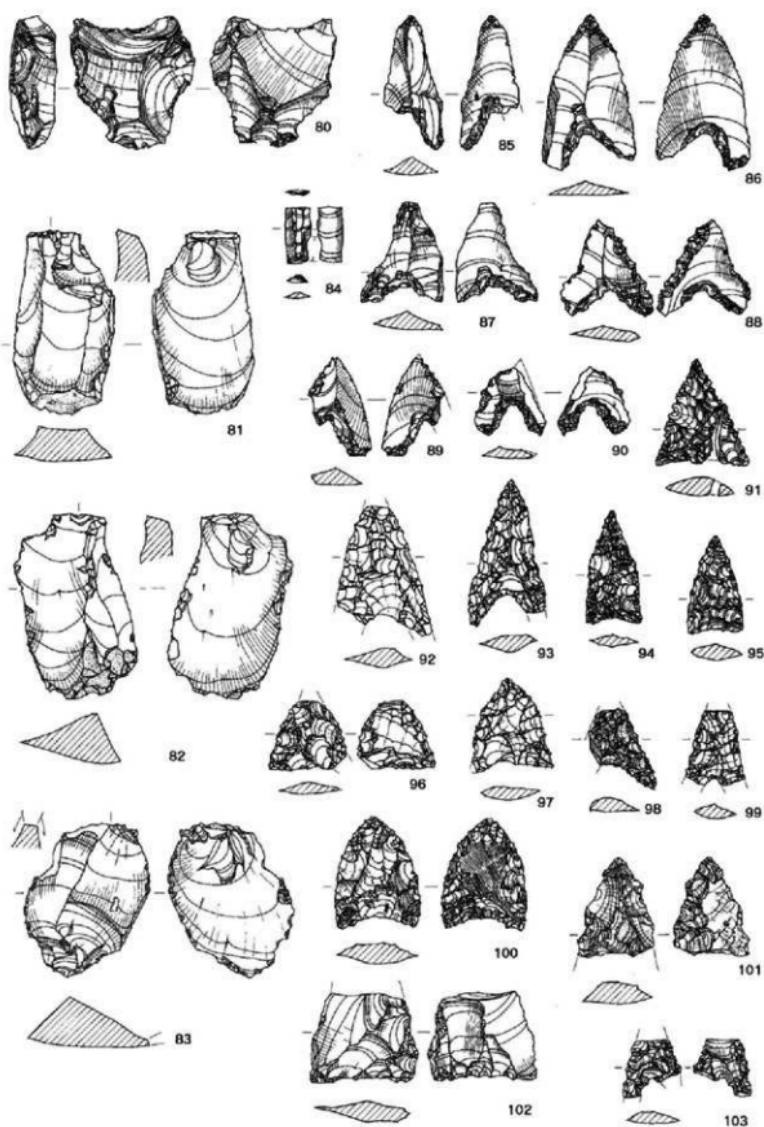


図20 出土遺物（剥片石器その1）実測図（縮尺1/1）

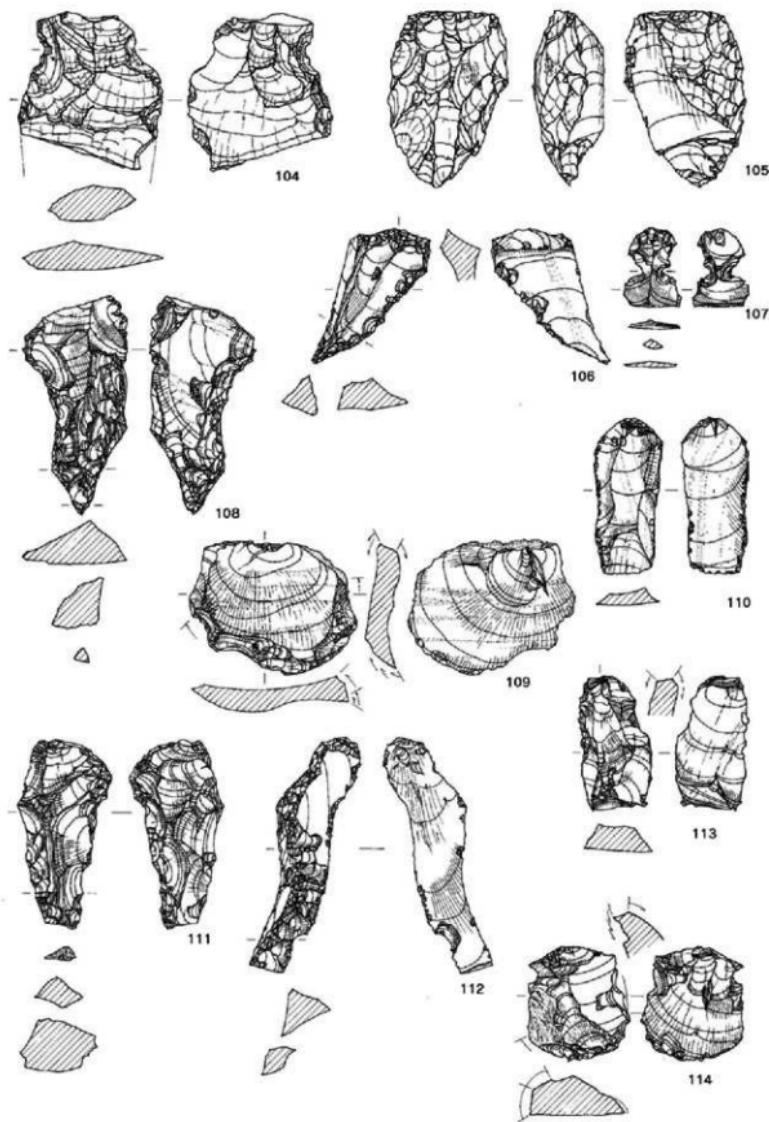


図20 出土遺物（剥片石器その2）実測図（縮尺1/1）

基で、先端部は使用時に欠損したものと考えられるが、未製品で製作時に欠損した可能性も考えられる。103は黒曜石製打製石鎌で、残存器長1.2cm、残存器幅1.2cm、最大厚0.3cm、重さ0.29gを測る。先端は使用時の欠損、両脚は破損している。基部は内湾している。裏面に素材主要剥離面を大きく残している。

石錐

106は黒曜石製石錐で、器長2.75cm、器幅2.6cm、最大厚0.8cm、重さ3.38gを測る。108は黒曜石製石錐で、器長4.45cm、器幅2.15cm、最大厚1.15cm、重さ8.04gを測る。主要剥離面はじめ素材剥離面は風化が激しく、石錐として二次加工を加え整形した面は剥離面の風化が進んでいない。先土器時代か縄文時代の不定形剥片を弥生時代に採集し、二次加工を加え石錐としたものか。111は黒曜石製石錐の未成品で、器長3.9cm、器幅1.9cm、最大厚1.1cm、重さ6.13gを測る。弥生時代の所産と考えられる。

剥片

81は黒曜石製スクレイバーで、器長3.78cm、器幅2.1cm、最大厚0.7cm、重さ6.02gを測る。82は黒曜石製Uフレークで、器長3.8cm、器幅2.6cm、最大厚1.05cm、重さ7.87gを測る。先土器時代の所産と考えられる。83は黒曜石製Uフレークで、器長3.3cm、器幅2.25cm、最大厚1.1cm、重さ5.97gを測る。先土器時代の所産と考えられる。表裏とも主要剥離面・素材剥離面を大きく残し、打面および表面に自然面を残しており、上下打面の石核から剥出された剥片の縁辺を使用したものと考えられる。刃こぼれがみられる。84は細石刃で、器長1.15cm、器幅0.5cm、最大厚0.15cm、重さ0.09gを測る。先土器時代の所産である。107は黒曜石製つまみ形石器で、器長1.6cm、器幅1.15cm、最大厚0.3cm、重さ0.40gを測る。縄文時代後期の所産と考えられる。縦長剥片の基部近くの両側面に表裏から粗い二次加工を加え、抉りを入れ、抉入部よりやや端部方向の近くで、主要剥離面から折断し廃棄されている。109はやや気泡が多い黒曜石製先刃搔器（エンドスクリー

パー）で、器長2.7cm強、器幅3.4cm強、最大厚0.55cm、重さ6.09gを測る。弥生時代前期前半の所産と考えられる。自然面を打面とする不定形剥片を素材として、素材先端に主要剥離面から角度のある二次加工を加え刃部を造り出だしている。112は黒曜石製打面調整剥片（スバル）で、器長4.86cm、器幅2.28cm、最大厚0.8cm、重さ3.63gを測る。113は黒曜石製Uフレークで、器長2.7cm、器幅1.45cm、最大厚0.55cm、重さ2.49gを測る。縄文時代後期の所産と考えられる。114は黒曜石製先刃搔器（エンドスクリーパー）で、器長2.35cm、器幅2.1cm、最大厚0.8cm、重さ3.86gを測る。弥生時代前期の所産と考えられる。不定形剥片を素材として、先端に主要剥離面から角度のある二次加工を加え刃部を造り出だしている。

石匙

104は古銅鋤石安山岩製石匙で、器長3.25cm、器幅2.95cm、最大厚0.75cm、重さ6.62gを測る。縄文時代後期の所産と考えられる。

3 まとめ

今回の調査では、有田遺跡群の北西側台地の落ち際を確認した。台地は、河川（室見川）の氾濫によって大きく削平されており、それより西側は河川性堆積が続いている。遺構検出したSX-01は、土層観察から自然流路と考えられ、弥生時代早期の土器片や礫石器、剥片石器を包含しており、その時期の流路と考えられる。出土遺物は二次的な磨滅がほとんどなく、上流から流れてきたものと考えるよりも、近隣集落から廃棄されたものと推定するほうが妥当であろう。このような出土状況としては、有田七田前遺跡の状況と近似しており、台地上に当該期の集落が展開していたと推測される。集落本体は、台地が大きく削平されており、遺存していない可能性が高いが、本調査地点から南へ約1km離れた有田七田前遺跡などとあわせて今後考察を加えたい。

報告書抄録

ふりがな	ありた・こたべよんじゅうに					
書名	有田・小田部42					
開書名	有田遺跡群第211次調査報告書					
巻次						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第871集					
編著者名	松浦一之介					
発行機関	福岡市教育委員会					
発行年月日	福岡市中央区天神一丁目8番1号 電話 092-711-4667 平成18年(西暦2006年)3月31日					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			調査原因
田島A遺跡7次	福岡県福岡市 早良区小田部5丁目			33° 34° 12°	130° 19° 43°	2004.06.07 2004.07.23
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
田島A遺跡	集落	縄文時代 ～ 弥生時代	自然流路 ビット	縄文土器、弥生土器、礫石器、剥片石器 旧石器	有田遺跡群北西端部の台地落ち跡を検出した。自然流路から弥生時代早期の土器、礫石器、剥片石器などが出土。	

Arita・Kotabe Site 42

The Report of The Research of Cultural Properties Fukuoka City Vol 871

31 March, 2006

© Fukuoka City Board of Education

Fukuoka City Board of Education

1-8-1 Tenjin Chuo-Ku Fukuoka City, JAPAN

Edited and published by Burial Cultural Properties Section

of Fukuoka City Board of Education

Printed by Iribashi Printing co.ltd

No parts of this publication can be copied by any means

without prior permission of this copyright owner.

有田・小田部遺跡42

福岡市埋蔵文化財報告書第871集

平成18年3月31日

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8番1号

印 刷 有限会社エージェント

福岡市中央区高砂一丁目20番2号

The Report of The Research
of Burial Cultural Properties
Fukuoka City Vol 871

Arita Kotabe Site 42

31 March, 2006

Fukuoka City Board of Education